

## 中島川水辺の表情(八)

ランタン

## 春節祭今宵逢う人みな…かな

古屋 陸夫

時は2月の中旬、中島川公園にも春節祭の候は、めがね橋周辺に数百数千の提灯が飾られます。川面には、ハスの花や大鳥などのオブジェが浮かべられ、夜には明かりが入り、一大光のページェント(美しい行列)で、ひととき幻想的な雰囲気醸し出します。行き交う人も近辺の人、旅の人、他国の人々も楽しみ、最近はとみに国際性が漂っているなあとして賑やかです。「ランタン祭今宵逢う人みな…かな」という具合。当方もただ唯、何の目的もなく、そぞろ歩きを常としている。今夕は、まだ明るい内にやってくる、道行く親子連れの対話が、ふと耳をかすめる。「お父さん！お寿司食べたい」と言う一年生位の男の子。おや、おやっ！えらい日本的な注文がとびだした！と聞き耳をたてていると、お父さん応えて曰く「今日は寒いだろう」と否定的。

確かに長崎の2月は、寒い日も多い。が、男の子も知恵をめぐらせて応戦する。「ぬくめて食べてもいいなあー」なんと子どもの発想の柔軟なこと。お父さん

は、ここでぐつと、次の言葉に行き詰まる。

夜空に下がっている提灯を見上げると、「長崎灯會」も一つ横並びの提灯には、「萬事如意」Ⅱ 意識すると、万事思うがごとく。一衣帯



中島川風景(片岡勝義氏撮影)

才まで一緒に俳句をやっていたわけだから、あれから10年の星霜。80才うーん、それが少しも変わっていない、というのやっぱり少しおかしいか！

当方が思い悩んでいると、こわいかに、一陣の風が天界から吹き付け、数千の提灯がさわさわと揺れ、魚市橋・めがね橋周辺に光粒子が舞い跳ね、この夜の幻想は一層神秘の度が深まっていく。この時、光りに包まれた彼女の声が遠くから風に乗って耳膜に届いてくる。「あらっ！もう時間ですわ、お別れですね」これは、昔物語で聞いたようなセリフだぞ。「椎の木町の方でしたね」「今は寺町○番地ですの。二人の会話は、この10年の間に微妙なずれが事々に現れた。彼女は光の粒子に守られるように、ふんわりとした動きで、寺町の暗い通路の方に動き、あつという間にその闇のしじまに溶け込んでしまった。

なんとという不可思議な出逢いであったことか。後日、ながさきの空のファンで女友のS氏に、この出逢いを告げると「おい、おい、これは異なる事を、彼女は10年前に亡くなったではないか。葬儀にも君と一緒に参列したはずだよ。幻想が幻覚に転じた一夜ではないのかね！」と女友はそう解説してくれたのであった。九州文学同人(本会協力委員)

### 風信

○七月と言えば、先ず七日の「タナバタ」に始まり、十三日より「お盆会」になるが「長崎のおぼん」は、昭和二十七年より旧暦に因んで八月十三日より十五日と改められている。

○タナバタの語源は「棚のある織物機」とあり、この行事の起源は中国古代の「乞巧奠」に始まると言う。我が国では平安時代より盛んとなり宮中でも此の行事はおこなわれ、其の模様は「源氏物語」の中にも綴られている。

○中国の伝承によれば、此の祭典は七月七日の夜、天上の天ノ川の右岸に牛をつれた牽牛星(農業神)。左岸には織女星があらわれ、天ノ川には多くの鶴が集まり、両星が語らう橋を造ったという。

○さて最後に、長崎のタナバタの資料として長崎がまたギリシタン時代の一六〇三年長崎イエズス会より出版されたVocabulario da Lingoa de Iapan (日ポ辞書をあげたい。その文にTanabata no Matcuri 天の川に向きあっている星に対して行う行事、すなわち星に対して供物を捧げ祭る事。

水のお国では、かつて一人つ子政策がとられ、はては小皇帝とあがめられたそう、それこそ一人つ子は、萬事如意だったろう。日本も事情は似てきた。少子化！大いに子供は大切な時代に突入しているのである。親子連れは手をつなぎ賑やかな人波の中に。やがて回転寿司のコーナーで、この親子連れを発見するのではないか。

陽は稲佐の山稜に落ち、辺り一面に夕闇が迫る。却つてこれ、いやまして提灯の灯が輝いてくる。当方は、魚市橋の適地に佇んで幻想的な光の行列に感じ入っていると、三メートル先の欄干で、女性が中空の輝きを頻りと眺めやる風情。おやっ！知っている人ではないか「霧子さん、久しぶりですね」声を掛けると、風情が困惑に変わる。次に「お人違いではないですか」そうだろうか、今を去ること10年前、俳句会で一緒に何十回も吟行にいつたり、暮れには彼女の弾く三味線で歌を合唱したりの忘年会。忘れるはずもない。そこで一歩踏み込んで「霧子さん！俳句の吟行に、よくいつたではないですか」やっぱりまちがいですわ！私、俳句ではなく短歌ですよ「霧子さんというの、本名ではなく俳号である。おかしいな、そこであなたの短歌は五七五ではないですか」と、更につき進む。「まあ、面白いことおっしゃいますね！名は露子で、短歌は五七五・七七みそひともじ、なんですよ！」と、笑顔が優しい。これが特長、着衣は濃い緑のツーピース。この濃い緑がお気に入り、今夜も其の姿が光の中に映しだされている。10年前のことであるから五七五から、この10年で七七が加わり字数が進歩したのだろうか？当方は笑顔と濃い緑から、いよいよまちがいの想いを深める。そこであと一押し「あ、忘年会では、あなたの三味線で唱ったではないですか」「まあ、やっぱりちがいますねえ、私、三味線は出来ませんの、お琴なら少々出来ますが」姿形は10年前とひとつも変わっていない。当時も若々しくてきれいな女人だったが、と、年齢を素早く勘定してみる。当時70

○今一ツ七月の行事には「飯香浦地蔵盆」がある。飯香浦について「長崎名勝図絵」によれば「長崎に渡りくる古道の湊」とある。一五七〇年以来、長崎・大村・島原地区は全てギリシタンであり、この地に新しく佛教が伝道を開始したのは一六〇〇年以降の事であり、浄土宗が最初の布教者である。飯香浦地蔵盆は浄土宗であり同系の地蔵盆が本河内にもある。

私は同地区の故峰末雄先生の御依頼もあり調査に参加させて戴いた。同地区には本村の地蔵堂と太田尾地区の二つの地蔵堂が上下にあり両堂共に念佛養会は良く伝統が守られており、昭和五十年長崎市は「飯香浦地蔵まつり飾りそうめん」の名称で無形民俗文化財に指定している。盆会は七月二十四日早朝より供養念佛鉦の音がきこえてくるが、私は二十三日夕方、太田尾地区の人達が「手造りのソーメン飾り」を背におい、念佛鉦にあわせて上の地蔵堂に納めに行く風影を今もなつかしく覚えてる。

○泉九条の会より連絡。七月十一日十三時三十分より長大医学部良順会館坂本町にて弁護士で憲法落語をされる「八法亭みややっこ」飯田美弥子女史の「憲法噺」があるので御参会下さいとの事(会費一、〇〇〇円)

○今月ご寄贈いただいた書籍

一松尾龍之介氏より「幕末の奇跡」。著書は巻頭に我が国蒸気船建造の事を述べられ、一八五六年発足の長崎海軍伝習所、長崎製鉄所、その影響をうけた勝海舟・本木昌造・五代友厚等の人物誌も多く記してあり幕末科学史研究に参考となった(弦書房発刊二、二〇〇円＋税)

一長崎文献社より同社発刊の次の各本 『長崎游学9・10』(各千円＋税)、『ステンドグラス巡礼』(一、四〇〇円＋税) 松尾順造氏制作の長崎県下の「島福江・久賀・中通等の美しい教会写真集。『日本名山花紀行』坂口莊一氏著、著者が一九九九年から十五年間に登った日本の山で撮影された写真で、何か強く引きつけられるものを感じました(一、六〇〇円＋税)、『リンガー家秘録』ブライアン・パークガフ二氏著。戦後の日本文化誌研究について新展開が見られる内容の本であり、大いに参考となる本でした(二、四〇〇円＋税)。

一シーボルト記念館より『鳴滝紀要25号』。今回も同誌関係者の調査・研究すべてにわたり新知識を得られる本でした。特に熊本大学の「志筑忠雄とその言説」には心ひかれました。(長崎市発行)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一 一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 2F

